

## 表題：瑞穂町協働フォーラム2017 概要

### 主催

瑞穂町・瑞穂町協働のまちづくり推進委員会

### 日時・場所

平成29年3月26日（日曜日） 午前10時～午後1時  
瑞穂町民会館ホール

### 出席者数

	参加人数
一般参加者	52人
瑞穂町協働のまちづくり推進委員	9人
事務局（部課長含む）	6人
<b>合計</b>	<b>67人</b>

### 配付資料

〈フォーラム当日資料〉

- 1 「瑞穂町協働フォーラム2017」ちらし
- 2 基調講演レジュメ
- 3 「瑞穂町協働フォーラム2017」アンケート

〈各種お知らせ、ちらし等〉

- 4 防災無線の電話応答サービス（地域課）
- 5 町内会・自治会に加入しませんか（地域課）
- 6 日本一のジャンボボケ（環境課）
- 7 さやま花多来里の郷（建設課）
- 8 みずほ山野草ウィーク2017（郷土資料館）
- 9 けやき館・耕心館パンフレット（郷土資料館）
- 10 森林健幸ウォーキング、健康エクササイズ（社会教育課）
- 11 震災ボランティア募集（推進委員会）

## 開会挨拶及び基調講演

(司会・杉本) それでは、定刻になりましたので、只今から瑞穂町協働フォーラム2017を開催いたします。本日は公私ともご多用のところ、フォーラムにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。私は本日の進行を務めさせていただきます、瑞穂町協働のまちづくり推進委員の杉本と申します。よろしくお願いいたします。

本日のフォーラムは、瑞穂町協働のまちづくり推進委員会と町との協働事業で開催しております。ここでフォーラムの内容を簡単にご説明します。お手持ちのちらしをご覧ください。はじめに、辻山講師による基調講演、次に役場地域課から行政の考える協働についての講演、そして最後の講演は瑞穂町協働のまちづくり推進委員会中沢副委員長の活動事例発表となっております。講演終了後には、講師から総評をいただき、フォーラムは終了となります。その後はホール後方に協働事例や委員の活動を紹介するブースを設置しておりますので、お時間のある方は、ぜひお立ち寄りください。それではフォーラム開催に先立ちまして、開会挨拶を瑞穂町協働のまちづくり推進委員会香取委員長よりお願いいたします。



### <開会挨拶>

(香取委員長) おはようございます。本日はお忙しい中、瑞穂町協働フォーラム2017にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。私は瑞穂町協働のまちづくり推進委員会委員長の香取幸子と申します。よろしくお願いいたします。

瑞穂町の協働は今年で4年目となります。推進委員会では、協働を広めていくために様々な活動しております。このフォーラムの準備はもちろんですが、協働を周知するために、お手元のチラシも推進委員が作成しました。

町の協働がスタートしたのは、平成25年で、「瑞穂町の協働を考える会議」において、延べ22回の会議を行い、町の協働の道しるべとなる「瑞穂町協働宣言」の策定、また、「瑞穂町協働宣言の実現に向けた提言書」を町長に提出しました。協働宣言はこのホールの入り口付近に掲示してありますので、ぜひご覧ください。

そして、平成27年には「瑞穂町協働のまちづくり推進委員会」が発足しました。平成25年の協働を考える会議では協働の基盤を築いたのに対し、この推進委員会では、実際に協働を行うための仕組み作りやより多くの町民に協働を周知することを目的として活動してい



ます。協働をより多くの町民の皆様を知っていただく方法を模索し、実際に文書や言葉で皆様の目や耳に届くような行動を起こし、より多くの理解をいただくことが私たちの使命であると思っています。

本日は辻山先生の基調講演、事務局の講演に引き続き、副委員長による事例発表をさせていただきます。このフォーラムを機に少しでも協働に興味をもっていただけたらと思っています。協働という漢字に引っかかってしまって、はてなマークがつく方もたくさんいらっしゃると思います。決して難しいことではなく、一人でできないことを民も官もなく、大勢の力を使ってよりよい方法を見つけて、目的に近づいていこうということだと思います。私自身協働に関わることで、たくさんの方と知り合うことができ、見聞も広がり、とても貴重な経験となっております。

ご挨拶の最後になりましたが、協働を考える会議のスタート当初から様々なアドバイスをいただいた辻山先生、並びに、瑞穂町住民部地域課地域係の職員の皆様に心より感謝申し上げます、開会のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

(司会・杉本) ありがとうございます。続きまして、基調講演に移りたいと思いますが、はじめに講師のご紹介をいたします。本日の講師は、地方自治総合研究所所長であり、中央

大学大学院公共政策研究科客員教授の つじやまたかのぶ 辻山 幸宣 講師です。辻山講師は平成24年度から瑞穂町の協働施策推進アドバイザーとして委嘱され、瑞穂町協働宣言の策定にあたり適切な助言等で、ご尽力をいただきました。

現在も引き続き、アドバイザーをお願いしております、町の住民組織からなる瑞穂町協働のまちづくり推進委員会においても、協働宣言の理念を実現させるために具体的な施策等についてアドバイスをいただいております。

本日の講演は「協働のまちづくり」ということですが、協働とは何か、また、協働のまちづくりについて考える良い機会であると思います。

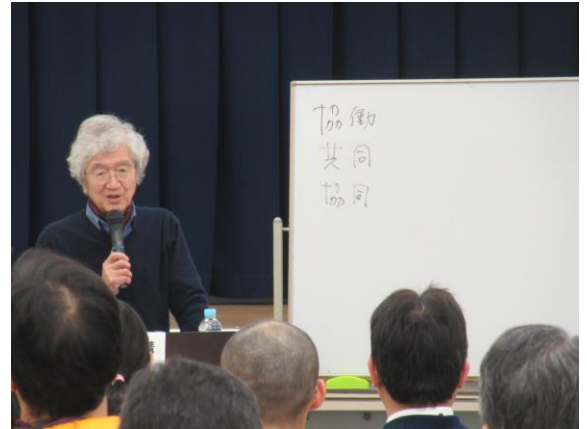
それでは約60分間の講演となります。辻山講師、よろしくお願いいたします。

#### <基調講演>

(辻山講師) 私は日野市に住んでおまして、今朝出てくるときに今日は大丈夫かなと、人が集まってくれるんだろうかと考えてしまいました。雨は降っているし、寒いけれど、みなさんお見えになっている。協働の話を各地で講演いたしますけど、いつも思うのはみなさんに何がおもしろくてここへ来ましたかということを知っているんですね。大体中身は、政府論や財政論、それなのにみなさん来て協働を考える。何が変わったかといえば、このようにして条例や財政や協働の話を知りたいという人たちが増えてきた。役場のやっていることを堅苦しくてつまらない話だろうと思わずに、足を運んでくれる人が増えてきた。これが今の地域社会の変化だと私は考えています。

限られた時間でありますので、あまり多くのことはお話できませんが、最初に今全国の自

治体が政府の掛け声でどんなことをやっているかを話します。まちひとしごと創生法の衆議院の特別委員会に呼ばれて、参考人で述べたんですけど、そもそもこの法律名称でまちが一番にきているのはおかしくないか、人からいくべきだろう。まず人づくり、そしてまちづくりならわかるけども、最後にしごとづくり。順序を変えてくださいと委員長に言いましたが、参考人にはそのような権利はありませんと、言われました。問題なのは、日本中がなぜこの問題に取り組んでいるかということなんです。それは、このままほっておいたら約半数の市町村が消滅するという報告があり、なぜなら20



歳から39歳の女性が半減する。これから数年の間に半減する、そうするとその年代の女性は子どもを産むという意味でとても大切な人々であり、そういった人たちがどこへ行くのか、それは3大都市へ行く。そうすると、それ以外のところはやがて消滅に向かう。それで政府は総合計画を立てまして、中身は子どもを増やそう、そして人口を増やそう、地方に人口を運ぶには、地方に仕事をつくらなければいけない。仕事をつくり豊かな町をつかっていこうということを言いまして、全国の市町村に地方版の総合戦略ということで作ってくださいと言ったんです。そうしたら、4つの市町村を除き、日本中のほぼ全部の市町村がその計画を出したんです。出したら交付金がもらえるというようになっていましたから。財政が厳しい中で、交付金を出すというのはあってもいいと思います、問題は中身です。人を増やすための政策を山のようにやっています、それは市町村がお金を出して婚活パーティを援助する、そして人々が出会って子どもが産まれればいいなと考えるわけです。その婚活で一緒になった方には若干の奨励金を出しますとかね。だけど出生率を高めていくことは短期間でできるはずがないんです、時間がかかります。だったら、産まれるのを待つより、よそから人口を呼んだらいいと考え、市町村の7割ぐらいがやっていると思うが、わが町に移住してくれたら住宅を提供しましょう、引っ越しのお金も出しましょうとやっているわけです。移住だけではなくて、今住んでいる人たちが都会へ行かないように、今の地域に就職をしてくれたら学生時代に支払った奨学金は返さなくてもいいですよと、引き留めておく。それから、そこに住んで外に務めに行く人や学生には、定期券を出しますから出ていかないでください。つまり、日本でやっていることは何かというと、人口の取合いになっています。しかもその取合いに金で釣ろうとなっています。結局奪われたところは消えていくしかないんです。ここで大切なことは、何が見落とされているかということ、人々がほかの町へ移りたいなという希望をもっているとします、様々な調査がありますが、移住したい地域の第1位は長野県と言われています。なぜかということ、東京という、大都市に近くて自然が残っている。田舎で暮らすという意味を達成してくれそうなのが長野県ということで1位になっているという解説なんですけど、むしろ私が思う大切なことは、良い町だから、ちゃんとした理由があって良い町だから行きたいという回答は本当に少ないです。その反対を申しますと、ほとんどの自治体が我が町へ来てくれるためなら、移住定住のためだったらお金を惜しみませんという政

策をやっているのに、なぜか私の町がこんなに良い町だから来てください、そしてそこに住んでいる住民の方から一緒にやりましょうという呼びかけはみていないんです。これは行政だけが一人歩きをしていて、住民が登場してこないということかもしれませんが、住民たちが一緒にやりましょうと言ってくれないことの重大さを私はとても重く受け止めています。ですから、お試し移住というのが流行っています。数日間我が町へ来て、泊まってあちこち見てください、良いところをさがしてください、そのための旅費や宿泊費は我が町で持ちます、というのが流行っています。問題なのは、お試し移住で行った時に、その人たちがその町から何を発見するかという報告をほとんど聞かないんですね。結局レジャーで使っている感じになっていると思います。

そこで私が今日申し上げたいのが、どんな町に人々が来てくれるか、また、そこに住んでいる人々が住み続けようと思う町ってどんな町だろうか。実は昨日、地方版総合戦略の瑞穂町のところを見まして、総合戦略そのものは特別なものではなかった、ただ私が発見したのは、瑞穂町の町民に対する意向調査の結果で、ずっと住み続けたいと答えた人が56%もいた。これは普通の方なら、できれば引っ越したいなど考えている、もしくは、特別考えていない人もいます。ずっと住み続けたいという人が半数以上いるというのは、私たちの常識でも高いほうです。原因はわかりませんが、住み続けたいまちの要素とは何かと考えた時、住んでいる人たちが互いに信じあえるということ。周りに住んでいる人たちを信じられないようなまちには、住みたくないですね、心を許せるというのが安心の構造を生みます。できれば、その中に自分の居場所、あるいは活動場所をもっている、ということが地域で生きる達成感につながると思っています。したがって、その意味で、まさに皆さんにお話ししようと思っっている協働ということがその条件を大きく満たすのではないかと考えている。そこで漢字の違うきょうどうがありますが、「共同」は同じ地域の人たちが力を寄せ合ってひとつのことを解決していくという意味で、「協同」は協同組合といったように、目的をひとつにしている結社のようなもの、「協働」というのは分からなくてですね、7、8年前に学者達が集まって、日本協働政策学会というものを作りました、私は入っていません。なぜかという、随分お誘いを受けたんですが、その協働が学会としてどのようなものか表明されていないからということ、まさに暗中模索ということだったんです。

私がその後、こちらで4年間も協働という言葉と付き合っているんですよ。瑞穂町の協働まちづくり宣言から始まって、私なりの考え方をまとめてきましたので、そのことを申し上げます。最初に、なんで役場が一生懸命やってくれればいいのに、住民が力を出さなきゃいけないんだと考えると思うんですが、住民は税金を払っているの。地域というものは、もともとは住民が自分たちで治めるしかなかったんです、もちろん大名とかがいた時代はあります、他にも領主とかいましたが、領主はその地域の公共的なことをやってくれるわけではありません。

私は色々調べましたが、3つのことが言えると思います。ひとつは相互扶助、お互いが家を改築する時にはみんなで声をかけたら手伝ってくれる、手伝ってくれたお礼に上棟式の時にたくさんの料理やお酒を用意して、お祝いします。協力してやっていくことを相互扶助といいます。2番目に共同作業、例えば水害になったら困るので、今の土囊とは違うと思

ますが、川の水通りが常に良くしておくために人々に声をかけて共同でその作業をやるんです。あとはトンネルです、災害で孤立して隣町と連絡がとれなくなった村がありまして、そこを調べてみたら隣町へのトンネルが共同作業で掘ってあったんですね。このようにして、公共的な事業を労働力をもちよって、やっていた。そして3番目の家族の協力ということで、子どもが産まれて成長するまでは、夫婦は田んぼや畑で終日仕事をしているので、その間はじいちゃんばあちゃんがその孫の面倒をみるということで成り立っている。そのじいちゃんばあちゃんの老後は、若い夫婦や孫たちがみんなで面倒をみる、今のような介護保険とか保育園みたいなものは当然ないわけですから。成り立っていた地域単位は何かを瑞穂町について調べてみたら、江戸時代から続いていた集落をみると、箱根ヶ崎・石畑・殿ヶ谷・長谷部・下師岡新田・長岡藤橋・二本木・駒形富士山・高根・富士山駒形新田、これだけの集落があって、これが単位でやっていた。明治の半ばぐらいまで続きまして、正確に言いますと1888年に市制町村制という法律ができるまで続きました。たぶん1000年以上続いたんでしょうね。その後、1900年にその法律によって、束ねて行政村と言われているんですけど、要するに国家が作った村というような意味で、レジュメにありますように瑞穂では、箱根ヶ崎・殿ヶ谷・石畑・長岡・元狭山という自治体に編成されたわけです。つまり合併したんです。その時から地域に政府ができてしまう。その前はどうしていたかという、政府がなかったわけではありません。政府のようなものがあつたんです。どうしてかと言うと、先程話した共同作業において、近代に入っているいろんなことが起きます、例えば分業ということで人々が働きに出るということが起きます。そうしますと、共同作業をやる声をかけても仕事があって全員が集まれないんですね。やがて共同作業に必要な労働力が減少していくんです、減少すると一人ひとりの負担が大変で、音をあげてしまうようになってしまいます。このままでは仕事がきつくて大変だということを話し合い、そこで村の必要な共同作業をやってもらおうと考えるんです。お金を集めて、道普請や台風の後始末などをお金を出してやってもらおうと考えるわけですね。ある種の自治政府みたいなものを作らざるを得なかったのです。そして、今でいう行政職員と責任者と、議会のような部分が出来てきた。そうやって運営されてきたわけで、これは1900年に至って、合併をして新しい市とか町村という自治体を作り上げていくことになります。この市町村という制度によって、何を実現しようとしたのか。それは全国を掌握した明治維新政府が行政をやらなければいけないので、市町村という区切りを作ってそこに担当を置いたというふうに考えていくわけです。それまで人々が共同でやっていた道普請や河川の管理などの多くの仕事をまとめ、全て行政が担当することを決めています。それでは、今までやっていた自然集落はどうなったんだろうかとお思いでしょうが、一般的には新しい行政村の一部となり、町内会の原型となったと言われています。

さて、そのようにしてできた市町村という行政の単位は、どういう風に発展したのかを見ますと、まさしく拡大の一途をたどりまして、戦争の時には徴兵チームなどができたりしました。全国民を管理して、そして税金を治めさせ、徴兵義務を課するためには、戸籍がなければできません。ところが明治政府は戸籍をもっていなかったのです。市町村に戸籍を作り、それを管理させることを考えたんです。戦前や戦争の時代においても、地域の発展の時代、

様々な時代を経過しまして、行政事務は拡大するばかりです。この行政需要の多様化や拡大というのは、戦後の経済成長の時に圧倒的に拡大します。それをやってのけた、そういう意味では世界でも簡単に国家体制になったと言われているんですが、実に多様な行政事務を処理している。国が方針を決めて、全国の市町村にやらせるというのは、一種の委任事務、国家から委任された事務を市町村が処理する義務を負うという体系を作りあげた。その事務に関する法律は多く、それを法律どおりにやらなければ罰せられ、裁判にかけられるので、強制的にやらせることができる。それでもやらなければ、代執行をする、というような強圧的な関係で事務を処理させてきたということが言えます。

この時に、なんでも処理する政府が出来上がりますので、世界でも共通に言われたんですが、国民の行政に対する依存というのが非常に強まっています。つまり、要求すればやってくれるんだ、ということが世界に広まってしまって、それまで住民たちができることはやろうということが途絶えていった。その典型例が1969年に千葉県松戸市に生まれた市町村、この市町村が市民に言われたことはすぐにやろうというすぐやる課というのを作りました。それによって、住民の要望が多くなり、それを解決していた。一時期は全国の自治体から喝采を浴びましたけど、その後、流行ったのはなんでもやる課が全国に出来まして、そのままやっているところは数少なくなってきました。その理由は何か、そういった住民に言われればなんでも解決しますという行政では、もうもたなくなったというのが正直なところです。1970年代後半、高度経済成長の終わりを迎える時代、当然ながら財政の資源も限られてきまして、職員の数は抑える。そうするとどうなるのか。行政が統治を行う資源というのは従来から3つと言われてきています。財源・人材・権限。お金をうまく出せないなと思っても、職員をあてにして相談に乗らせるとか、そういつて解決してきた時代もあったんです。しかし、給料を払わなければいけないですから、財源が乏しくなると当然ながら職員の数も減らしていく。言ってみれば、安上がりの政府にしなきゃいけない、ということを出した。その時に注意しておかなければいけないのは、新しい公共という言葉が生まれてきていますが、逆に古い公共というのは人々が望んでいることをなんでも解決しますという政府の在り様でございます。それが限界にきたので、新しい公共と言わざるを得ない、最初にこの言葉を使ったのは鳩山由紀夫民主党内閣でございます。その時の所信表明演説の中で、公共というものが全て政府の役割ではないと言ったんですね。公共を実現するのは、地域の住民の方たちが力を寄せ合って、それを支援するのは政府の役割だと言ったんですね。その時から支援政府という言葉が生まれてくるんです。政府は支援だけしていればいいというのが、もし協働という概念につながるのであれば、私は違うと思います。

総務省と国交省は地域運営組織というものに着目をして、全国につくっていかう、それは小さな拠点と言われていています。旧集落の小さな単位で組織をつくって、そこで発生する様々なことを全部そこで対処しようとする組織です。そのためにはそういった組織に法人格を与えていくべきだという議論をやっていきます。494市町村に1600の地域運営組織を作りたい。私はここで考えられている支え合う地域というのには賛成です。ご承知のように政府は災害時に助力を必要としている高齢者や障がい者を調査いたしまして、名簿を作っています。その名簿を渡すと言う条件で、災害の時に誰がどのお宅の高齢者を助けて避難させるか



という計画を出してくれと言われていました。この前提になっているのは、災害発生時に消防を頼りにしてもらっては困りますというのが、自治体が考えでした。まず地元で助け合うということを考えてもらう、そのために行政が要援護者の名簿を作るという役割をやる。一般の人には作れません、個人情報保護法というのがあり、なかなか難しい。そこで、行政と手を組んで、安全を守りましょう。これもひとつの協働かなと思っています。

時間がなくなってきたので、最後に、住民の力で地域を治めていく要素を増やしていく。これは重要だと思っています。私が申し上げた、かつては住民がなにもかもやっていて、それが近代に入って、担いきれなくなった、共同作業が成り立たなくなったから、その代わりに自治体のようなものをつくったということをお願いしていて、まさしくそのことに戻りつつあります。それは、この自治体は住民の共同体だということを私は大事にしたいと思っている。いずれにしても、機運が高まってきて、いろんな作業がやられるようになりました。私がこれまでに聞いた協働という事業を少し紹介します。

ねこじゃらし公園、これはネット上でも有名になったんですけど、世田谷区の東奥沢公園と言って、最初世田谷区が建物を建てて温水プールを作って地域の方にスポーツなどで使ってもらおうという提案をしたんですね。そうすると、周りの地域の人が、そんなにお金をかけて温水プールを作っても高齢者ばかりなのでということで計画を押し戻しました。すると、世田谷区は住民にどうすればいいですかと聞いたんです。住民たちは集会を開いて、公園の使い方や何を設置しようかと話し合った結果、何もいらない、今のままで良いということになりました。したがって、現在もねこじゃらしが生えているだけとなっています。世田谷区との話し合いの中で、この公園は住民たちが管理するから、行政には公園の入り口に公衆トイレを作ってくれと言ったそうです。

私の住んでいる多摩ニュータウンの近所では、押立堀という地域で、多摩ニュータウンを作った時の残りの土地で細長く残ってしまったんですね。そこをほっておくとゴミを捨てられて問題になりました。そこで稲城市は業者を手配して、片付けようとしたんですが、業者が片付けているところに、住民が出てきて、ここのゴミを綺麗に持ち去ったら、またゴミが捨てられて同じことの繰り返しになるだろう、どのようにしたらゴミ捨て場でなくなるかを考えてからにしてほしいと伝えました。そこで住民はまた集まって話し合い、その場所を1年中花が咲いている公園にしたらゴミが捨てられないだろうと考え、区割りをして担当を決めて、ずっと花が咲いている空間にした。行政側は最初の整備費と公園使用の権利を確立して、一緒にやっ払いこうとした。その他、スポーツクラブで町おこしとか、子ども食堂とか、高齢者の居場所を作る活動だとか、このようなことに行政がどの程度手を貸せるかということが課題になってきます。なぜならば、どの活動も活動資金、様々な便宜、情報に飢えているんです。そこで、後ろのブースを見ていただいて、どのような行政の協力が必要か話し合っていたいただきたいと思います。

最後に、この協働で最初に汗を流すのは住民です、私は瑞穂町の職員を対象にした研修をやっていますが、その時に申し上げたのは、行政側が行き詰まっているからといって、協働で住民を使ってはだめだと言っています。行政のできなくなったことの言い逃れを住民に求めるにすぎなくなってしまうからです。まず、住民が活動を始める、その中で行政に手助け



してほしいことがあったら役場に提案する、そこで役場はどのように受け止め協働ということ組んでいくかという段取りでいきたい、したがって行政から先に提案をしてはいけない。こうすることで、良いことは何かとよく聞かれるんですが、生涯付き合える友人ができること、地域でできる友人ですから長い付き合いです。これは健康につながります、話すことで脳の健康に良い、一緒に何かをやることでコミュニケーションにつながる、生きがいとなることあること、またそれが行政とやることになれば公共の実現になることで達成感が高まる。今、協働ということが世の中に出始めたばかりです、これからどういう中身にするかというのはみなさんの努力にかかっています。

(司会・杉本) 辻山講師ありがとうございました。今後の町の協働の在り方について大変ためになる講演で、協働のまちづくりの参考にさせていただきたいと思います。貴重なご講演、誠にありがとうございました。ここで、10分間の休憩といたします。次の講演は、11時10分からスタートしますので、よろしくお願いいたします。

<休憩>

#### 事務局講演及び協働事例紹介

(司会・杉本) それでは、時間になりましたので、これより役場地域課による行政が考える協働についての講演に移りたいと思います。それでは住民部地域課地域係水村係長、よろしくお願いいたします。

<事務局講演>

(水村係長) みなさん、こんにちは。本日はお忙しい中、またお足もと悪い中、瑞穂町協働フォーラムにお越しいただきまして、誠にありがとうございます。私は瑞穂町役場住民部地域課地域係長の水村と申します、よろしくお願いいたします。早速ですが、私のほうでは職員地域情報コーディネーターという取り組みをしております。3年ほど前から町内会などの活動に職員を派遣させていただいております。私自身もコーディネーターとして町内会の活動に参加させていただいておりますので、その中から事例の紹介や私の感じたことを何点かお話しさせていただきます。

日頃の生活の中で、多くの方が犯罪のない安全で安心できる町に住みたいと感じていると思います。町としましても、青色回転灯を装備したパトカーのような車で町の中をパトロールしてしまして、一定の犯罪の抑止には効果があると感じているところではございますが、効果については限界があります。その一方で、40町内会・自治会がございまして、町内会による自主的なパトロールが行われているところが多くあります。コーディネーターとして納涼祭ですとか、いろいろな行事に参加する中でパトロールにも参加しております。参加している状況をいくつか抜粋して、ホール後方に掲示してありますので、後ほどご覧になって

いただければと思います。町内会の方々と一緒にパトロールをしていますと、自分の住んでいる地域の危険な場所や注意が必要な場所を事細かに把握されていることに驚かされます。ある町内会では、土地柄地元の出身ではなく外から町に来て、お住まいになられているところがあるんですが、若いお父さん方が移住してきて、何か地域のためにやりたいということで、町内会とは別に青年部を立ち上げて、町内会の行事がある時には率先してお手伝いをしてくれる、羨ましい地域がございます。町内会長さんが数年前にパトロールをする時に子どもと一緒にしてみたらどうかということを出発点として、夜間のパトロールですので子どもだけでは危ないということで班分けをして、青年部と一緒にパトロールをして、安全に配慮しながら世代を超えてパトロールしている事例もあります。



また、ある町内会では、40年前に一組の親子が地域のためにパトロール始めて、それが40年間引き継がれているところがありました。夜9時に集まって、拍子木を叩きながら歩いているんですけども、あるお宅の前では、拍子木の音を聞いて小さいお子さんとその母親が出てきて、近づいていきますとその子のおじいちゃんがパトロールをされていて、少し話をしてお互いが笑顔になっているのを見てとても印象に残っています。

自分たちの地域は自分たちで守るんだ、という活動は町内会独自で様々な形で取り組みがなされております。このような町内会のパトロールによる防犯防災活動の効果というのは、町内会に加入している方だけではなく、地域に住んでいる全ての方が恩恵を受けているという認識をしていただけたらなと感じております。これ以外にも町内会の活動は様々なありますが、時間の都合上、ここまでにさせていただきます。町内会の活動をする中で人材は大事でございますが、人材以外にも財源というものがなくなってきます。町としましては、町内会による防犯防災活動や納涼祭などのコミュニティ活動には、地域づくり補助金を交付させていただきまして財政面での支援をさせていただいております。それ以外にも町内会連合会を通じて、各町内会の取り組みに関して情報提供などをさせていただいているところであります。町内会、役場、それぞれ立場や役割が異なりますが、お互いがお互いの立場を理解し合いながら、協力することでより良いまちづくりにつながっていくのかなと思っております。今回は町内会と町との協働の一例をご紹介しましたが、立場の違うもの同士が共通の課題や問題に対して、お互いに協力し合うことで、お互いメリットがあることが協働ではないかなと考えております。協働と言葉で聞くと、難しいという印象を持つと思いますが、既に実際に身の回りで協働による活動は行われております。安全なまちにしたい、ごみのないきれいなまちにしたい、大好きな瑞穂町の景観を未来に残したい、そのような思いがあり、自分の経験を生かして活動してみたいけれど、一人ではできる事は限られているなど思われている方は、一度地域課の方へご相談いただければと思います。協働の推進委員会は委員さんの協力を得まして、平成28年度から役場の地域課では、協働したいという方がいらっしゃった場合には協働事業提案書というものを作成していただいております。その提案書を書く

と、どんな方がどんな事をして、どんなメリットがあるのか、町に何をしてほしいのか、そのようなことがわかる取り組みをしております。本日ホール後方に協働事業提案書を掲示していますので、ぜひご覧ください。また、ご興味ある方は役場窓口までご相談いただければと思います。本日は貴重なお時間をいただきまして、誠にありがとうございます。

(司会・杉本) 水村係長、ありがとうございました。それでは、次に、みんなで楽しむ平地林づくりと題した活動事例を発表いたします、中沢副委員長よろしくお願ひします。

(中沢副委員長) みなさん、こんにちは。瑞穂町協働のまちづくり推進委員会、副委員長を務めています、中沢清と申します。本日は雨が降っていて、冬を感じさせるような寒さの中、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。これから瑞穂町での協働のまちづくり推進委員と一緒に進めてきました「みんなで楽しむ平地林づくり」について発表させていただきます。よろしくお願ひいたします。

発表の前に簡単に自己紹介をさせていただきます。私は瑞穂町の南平で2000年からマウンテンバイクを中心としたサイクルショップ中沢ジムを経営しております。開店と同時に17年瑞穂に住んでいまして、好きでこの町に住んでおります。町の為になにかしたいなと日頃から思っていました。趣味が高じて自転車店を経営していますが、日々西多摩の瑞穂、あきる野、日の出、青梅を自転車で走っています。生活の足としても自転車を愛用しています。



役場との関係は協働のまちづくり推進委員会だけではなくて、きらめき回廊計画のルート整備部会でしたり、町のガイドブック的なものやさくらマップを作っております。お陰様で、色々な形で関わらせていただいている関係で、多くの方と知り合える機会が得られています。日頃から自転車に乗っているの、色々なところ見て回った結果、平地林づくりに関して、私の今まで思っていたことが活かされたというのを話していきたいと思ひます。

それでは、今回発表します、協働事業のモデルケースになっている平地林づくりですけども、平地林ってなんだろうと思ひ方があると思ひんですが、簡単に言うと平らな林なんですね。山ではなく、誰でも入りやすい平らな林ですね。この画面を見ていただくと、バーズアイと言って、けやき館の床一面にある航空写真、鳥の目で見たとおんなじ写真なんですが、緑の島は狭山丘陵で、点在している緑が平地林になります。私は自転車で瑞穂町を走り回って、この平地林の存在を知りまして、初めて林に入った時に、まるで軽井沢や八ヶ岳のよう、なんて素晴らしい道なんだろうと思ひ、看板には保存樹林地と書いてあったり、ゴミが落ちている場所があったりしたんですけど、これをなんとかしたいなと思ひは引越してきてからずっと思っていたことなんです。私はマウンテンバイクに乗っているんですが、山から締め出しのような、誰が来ているかわからなかったりするので、そういった歴史がある中で、そうならないようにボランティアをしようと思ひまして、実際にボランティアの団体を

作りました。団体を作るにあたって、何をしていけばいいかということを考えて、日頃から模索していました。山や自然の中に入っていくことは何に繋がるかということ、町に残された緑、身近な自然を守りたい、誰でもが関わりやすいこの土地、子どもにとっては新鮮で大人にとっては懐かしさを感じられて、お年寄りや障がい者も一緒になってできるんじゃないかなと模索していました。話をもとに戻すと、ボランティアの団体を作ろうという思いをもっていても何もできないので、実際に西多摩マウンテンバイク友の会という団体を2011年に作りまして、現在は会員数が270名程で、1年間に70回ぐらいのプログラムを行い、延べ1000人ぐらいが西多摩地区での里地里山活動を行っております。それから地域活動としてお祭りの手伝いやごみ拾いも行っております。ボランティアセンターと一緒に災害ボランティアセンター設置訓練を行っております、自転車隊を形成して、町の避難所を回り、情報伝達役や安否確認で要援護者と言われている高齢者や障がいをもたれている方の世帯に対して声掛けをしています。実はボランティアを進めていくにあたって、ボランティアセンターみずほには様々な指導をしていただきまして、どういったように進めていけばいいのかというのを教わりました。遊びの中で関わっていく、やりたい人が出来る範囲でやっていこう、ボランティアは使命感も大事なんですが、なかなか長続きしないので、遊び心をもって継続性をもたせる。ただしそれを指導する側はプロでなければいけないというのを教わりました。団体を設立していくなかで、現在行っている活動は、あきる野市のほうで言うと、菅生の森づくり協議会とあって、あきる野市の山の再生活動で、昔にあったような山の形を作ろう、それから未来に繋がるような新しい形の山づくりをしています。散策路やマウンテンバイクの体験コースを作ったり、桜を植樹したり、ビオトープを作ったりしております。多くの方が親しめる森づくりを目指しています。

そして、もうひとつは、郷土の恵みの森づくりという、五日市の深沢というところなんですけど、こちらはあじさい山が有名です。私たちも地域の方と一緒に作った散策路、これは樹齢1000年の杉を見に行く道であったり、石灰岩の上に立っている檜を見に行くルートになります。地域に若い人がいないので、地元のほうが人手を必要としていて、私たちはあきる野市でマウンテンバイクに乗っているんで、地元との交流が必要になっているので関わっています。関わるにあたって、ごみ拾いを行うと、交流が生まれやすいですね。なぜかと言うと、住んでいる地域を綺麗にしたいんですね、綺麗になると会話が生まれて、ごみ拾いをしたあとに花を植えると、次にまた来た時に花がどうなっているか興味を持てるので、交流や継続性につながるのかなと思います。ごみ拾いをして会話をしていくと、私たちのほうから、他にお手伝いできることはありますかと聞いたり、住民の方から草むしりの話がきたりします。そういったものに対して、マウンテンバイカーは走るだけではなくて、山の仕事や地域の仕事が好きな方が多くて、自然の中で楽しむスポーツなので草刈りとか穴掘りとか好きなので、そういったところから地元のお手伝いをすることがあります。世代間交流や地域交流を通して、この地域に住んでなくても地元の方のお話を聞いたり、花の話を聞いたり、昔の話を聞いたりすることで、自転車に乗るだけではなくて、地域に関わる楽しさを知っていくわけです。

あきる野市での活動で学んだことを、瑞穂町ではどのようにしていこうか。私は推進委員

でありながら、マウンテンバイクの団体もやっているの、瑞穂町でも何か良い形にしたいなと思っていて、これから実際に瑞穂町の推進委員として関わっている話をしていきます。まず、平地林の目的は、町が推進している協働を生かして平地林保全活動を行う、そして人と人がつながり、自然を通して過去、現在、未来の時間をつなげる、平地林がきらめき回廊のシンボルになりうるようなことだと思っています。長岡の平地林は場所ですと、岩蔵街道と八高線の間であって、シクラメンスポーツ広場の裏あたりです。直線800m、横も400mぐらいあります。その森は東京にはないような場所で、きらめき回廊のシンボルになりうるんじゃないかなと思います。

実際に協働とは、どのような役割をしているか。活動は2年目で、最初に企画立案は推進委員、今はボランティア団体と郷土資料館の学芸員の方との連携ができ、地権者とのコーディネートを役場地域課、建設課にさせていただいて、現在では近藤農園さん（地権者）との交流もうまれています。また、役場地域課に瑞穂町自然科学同好会との橋渡しをしてもらいました。自然科学同好会は30年ほど狭山丘陵のことを調査されている方々なんですが、平地林のロードマップを指導いただくような形になっております。ごみの処分に関して、1年目の時に役場環境課に協力させていただいて、道に落ちているごみを一緒に拾って処分させていただきました。現在、まだごみが落ちている場所があります、それぞれ地権者さんが持っている土地に落ちているので、それをどうしようかという前向きな話もさせていただいております。現場での作業はみんなでやっています、みんなが住んでいる場所であり、みんなが好きな瑞穂町なので推進委員会と西多摩マウンテンバイク友の会と役場地域課、環境課、建設課、そして地域の住民の方々、特に家族での参加が増えています。

次に平地林の活動について具体的に紹介します。まず、活動するにあたって、地域の歴史や現状を知る必要がありますので、自転車を乗りながら町の図書館で話を聞いて、けやき館の学芸員の方と一緒に町をまわりながら、平地林に向かいました。明るい林づくりをしようということ、木や雑草を切ったり、つるをとったり落ち葉を掃いたりするんですけど、ただ単に綺麗な森を作るだけではなくて、鳥が逃げよううっそうとした場所も残したり、自然環境にあった形のことをしなければいけない。どうしても私たちは綺麗になっていけば良い森だと思ってしまいうんですけど、実際は多様な植物や生物が住んでいますから、それらを生かしながら人が入っていく仕組みをつくり、実際にこういう形で森を作りましょうと話が出た時に、今度は推進委員、各団体、地域の方が来て行いうんですけども、目標としては人が手入れをしていた頃の生産性のある明るい林にするために活動をしていこう、明るい森を作りながら、例えば落ち葉を堆肥にするとか、広場を作れたら面白いと思うんですけどね。昔からこころへんに住んでいた方には、子どもの頃の懐かしさを見せたいし、子ども達にとっては未来につながるもの、親にとっては自分たちの子供やその先の世代にまで誇れるものを作っていきたいなと思っています。平地林における協働については、1年目に最後の締めで話したことなんですけど、東京都でここまで大きな平地の林はない、身近であって様々な生き物や植物が生息している平地林、これをみんなの手で残し繋いでいく。自然を通して人がつながる場であり、瑞穂町にとって貴重な財産であると考えております。継続的な活動を続けていくことで、愛着が湧きます。愛着が湧くことで瑞穂町の良さを再確認できます。そ

して、愛着を持った方が外の人に向けて発信していきます。そうすると外の人たちが瑞穂に遊びに来る、そんな素敵な場所になるんじゃないかと思っております。

その結果として、ひとつ3月20日にイベントやりました。長岡平地林の観察会と瑞穂の野菜を味わう会ということで多くの方に集まっていただきました。まず、活動場所に向かうのに、自転車に子どもを乗せながら行きました、大人も笑顔で乗っています。また、森を散策しながら、どんな場所なんだろう、どういう風に手が入れているんだろうという思いを持ちながら移動していきます。奥に行く楽しみがあるというか、まっすぐ綺麗な道があるのが長岡の平地林です。学芸員による自然観察会で、花や木を見たり、ここの森をどういう風にしていこうかという話をしながら、落ち葉を掃いてみると色々な発見があります。自分たちの気づかないものが足元をみると、花が咲いていたり生き物がいたりするので、ひとつひとつが発見で、いくつになっても学びって楽しいなと思えるような自然観察会でした。そして、落ち葉溜めを作りました。鳥の巣のように見えるかもしれませんが、バイオネストと言って落ち葉を溜めていく場所で、これを堆肥にしていきます。またこれを周りの畑で使えたらなと思っております。場があると、想像力豊かな子ども達はいろんなことをします。また、瑞穂の野菜を使ったごはん、豚汁の中に入っているねぎと人参は地権者の近藤さんから提供していただいて、魚の南蛮漬は九州のボラを使っていて、協働の推進委員の菊池さんが作っているニンニクと人参、あとはほうれん草のお浸し、こんにゃくは長谷川さんのお父さんのこんにゃくを使っています。瑞穂のブランドのものを外の方に紹介することができました。当日は明るい林でみんなで集まって、自分たちが手を入れた場所で集まって、ごはんを食べると会話が弾む。これは私個人的にやりたかったんですね。自分たちで考えて、自分たちで行動して、役場と連携をして、こういった場を作って、人が集まって、また人から人がつながって面白いことが始まっていくんじゃないかなと思います。

活動した後の帰りなんかは、役場の方と元町内会長の推進委員の田中さんと私で歩きながら話したり、協働をやることで、今まで交流がなかった人たちとつながっていける、非常に贅沢な時間なんだなと思います、協働がなかったらこういう人たちとお付き合いすることもなかったのかなと思いました。協働って難しく思われがちなんですが、辻山先生からお話をいただいて、自分がそこに飛び込んで関わることで、非常に学びました。皆さんの中でも、何かやりたいこととか、こんなこと町とできるのかなというのがあったら地域課に行ってみると、色々教えてもらえることがあるのかなと思います。協働することで、平地林に関しては、どういう効果があったかと言うと、人と人がつながるといふのと、世代間交流や地域のつながりができました。将来的には、健康寿命が長くなるんじゃないかなと、それと外に出る機会がない人が外に出てきてもらったり、平らな森なので障がいを持たれている方やお年寄り、みんなと一緒にやりたいと思って出てきてくれるんじゃないかなと思います。私の場合は遊び心から始まった協働なんですけど、様々な形で行政と住民の団体が連携を組むことができると思いますので、みなさん地域課に行っていたらと思います。それからこの後、各ブースの方で説明がありますので、わからないことがありましたらブースでお話いただいたり、何か自分が持ってかえっていただいて将来やりたいことのきっかけづくりができたらいんじゃないかなと思います。本当はもっと話して、協働について伝えたいことだら

けなんです、限られた時間なのでここで終わってしまいますけども、皆さん気軽に役場に行くのは、なかなか難しいと思いますけども、実は自分に関わることは自分でできることなんで、ぜひ一度地域課のほうへご相談行っていただけたら面白いなと思います。また、ボランティア団体に聞いてもらえることでヒントがもらえるのかなと思います。今日は駆け足で話してしまいましたけど、20分間ありがとうございました。

(司会・杉本) 中沢副委員長ありがとうございました。それでは、次に辻山講師から総評をいただきたいと思います。辻山講師よろしく願いいたします。

### 講師総評及び各委員紹介

(辻山講師) 中沢さんとは長い付き合いで、4年になるわけですね。このように活動を丁寧に説明していただいて、前回もここに立っていたんですが初めてのような気がしました。先程もボランティアのブースなどを見させていただいて、皆さんの顔が楽しそうで、ということが印象に残っています。みんなが楽しんで豊かになるというのが、これまでのボランティア論の主流だったんですが、ところが今日の話の中では、楽しみながら瑞穂町の大切な財産を守っているんだなというのがよくわかって、自分たちが動くことで町が良くなると実感できているんだろうなと大変羨ましく思いました。

もうひとつだけ話しますと、大阪市の職員が話したんですが、清掃事業でごみを集める時にふれあい収集というのを提案してやっているんだと言って、この中身は、ごみの集積場まで持ってこれないお年寄りの家庭、あるいは障がい者の家庭を調査して申し出があれば、1件1件取りに行くということを決定して、やっているんです。その話を伺って、すごいと思うけど、50点だとも思いました。その時私が言ったのは、あなたたちのやり方だと、行政の仕事をどんどん広げていくだけです、どこまでもそれを抱えていけるんですか。私だったら、地域のリーダーと相談しながら、まずそのお宅の周りで代わりにごみを出しますという家を探してもらって、それぞれの地域でごみを運ぶ担当を決めれば地域の中の運営関係が出来て、やがてごみだけではなくて、ちょっとしたこと、例えば庭の掃除を手伝うとか、体の不自由なお年寄りの電球を取替えてとか、小さな困りごとって結構あるんですね。そういったことにも広がっていくのではないかと、そのことが地域で安心して暮らすということ。ごみを取りに来てくれるから安心して暮らせるということにはならないです。そのきっかけを作るためには、まず地域で支え合うという体制をどうやって作っていくかというような提案もあったはずだと思います。

小さな困りごとというのは、実は先程申し上げた地域運営組織という提案を行った明治大学の小野寺先生の言葉なんです。小さな困りごとをどうやっていくか、どうやって周りで支えていくか、そのことと行政はどう結びついて、行政の地域での政策を成り立たせていくか。そういった意味では、あの平地林という瑞穂の財産を守っているのはマウンテンバイクに乗っているあの方と思うと感動いたしました。



(司会・杉本) 辻山講師貴重なご意見、ありがとうございました。これで、本日予定しておりました講演は全て終了となります。基調講演及び事例発表の方々に今一度、大きな拍手をお願いします。

本日は、皆様お忙しいなか、お集まりいただきまして、誠にありがとうございました。いかがでしたでしょうか。協働のまちづくりについて少しでも、ご理解いただき、そして一緒に考えていただければと思っております。また、お手元の資料の中にアンケートがございますので、ご記入の協力をお願いします。お帰りの際にアンケートは箱に入れていただき、鉛筆の返却をお願いします。最後に、協働のまちづくり推進委員会の委員を紹介させていただきます。委員のみなさま、前にお集まりください。

#### <委員整列>



(香取委員長) 今日はありがとうございました。瑞穂で家庭料理おだかというお店を2軒やっております香取幸子と申します。協働に関わらせていただいて4年になりました。これから先、新しく始めることが協働につながるのではなくて、現在困っているなどか、こんなことをやっているけどどうなんだろうということが協働につながって行って、もっと広がっていけるようなことがたくさんあるような気がしています。私もそうですが、皆さんも、そういう意味で協働をもう一度見つめていただけると楽しい未来にかわっていくのではないかと思います。どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

(中沢副委員長) 副委員長の中沢です、先程はありがとうございました。私はこの町にずっと住んで、楽しく暮らしたいし、娘がいるんですけど、娘にとって住みよくて、この町で産まれて良かったなと思ってもらえるようなまちづくりをしたいと思っています。あとは、マウンテンバイクが好きなので、瑞穂町にマウンテンバイクが走れる場所を作れたらいいなど

365日考えています。皆さんの力を貸していただけたらなと思っておりますが、それ以外にも町の素晴らしい部分は紹介していきたいなと思っております。よろしくお願ひします。ありがとうございました。

(石川) 私は瑞穂町の高根で知的障がい者の方のグループホームとショートステイをやっています。この協働の委員になって2年目です、この平地林がどのようになっていくか楽しみで活動しております。

(小山) ボランティアセンターの小山と申します、今年度委員となりました。すごく協働という言葉が難しく、皆さんにいろんな質問ばかりして1年過ぎたような気がします。ここでようやく楽しくなってきたかなと思ったんですが、これで終わりとなります。また、何かの形で皆さんといろんなことができたかなと思います。ありがとうございました。

(菊池) 瑞穂町に引っ越してきて3年で、農家をやって2年目の菊池と申します。今年で委員を2年やらせていただきました。まだまだ自分が農家で未熟なもので、あまり自分から発信して協働というのは難しいんですけども、中沢さんと一緒に平地林をやらせていただいたりとか少しずつ自分のできることに参加していきたいなと、楽しんでやっていきたいなと思っております、今日はありがとうございました。

(豆田) 20年以上前から瑞穂町に住みまして、ヒッポファミリークラブの活動をやっています、豆田です。私も推進委員という事で、声をかけていただいて、初めて協働という言葉を知って、まだわからないこともあるんですけど、皆さんと一緒にいろんな話を聞きながら、町の事に関しても知ることが多くて、やってよかったなと思っております。ありがとうございました。

(小松) 委員をさせていただいております、小松揚明(こまつたかひろ)と申します。瑞穂町ではバスケットボール連盟をさせていただいております、スポーツにおけるまちづくりをしたいと思い、委員をさせていただいております。とにかくスポーツで元気にしたいと思っていますので、競技問わず、いろいろなことで瑞穂町を元気にしていけたらと思っています。今後ともよろしくお願ひします。

(田中) 私は高根地区で農業を始めた田中と申します。実は、協働事業があるのを知らなくて、たまたま昨年、もう一人の相棒と話をしまして、通学路が捨てられたごみで環境が悪化しつつあったんですね。それから町に相談したら、協働事業というものがあって、町と住民の方の協働でやれそうだなという話を伺いまして、只今その準備中でございます。それが実現すれば人と人とのつながり、また、コミュニケーションの場になるかなと思っています。これから考えながらやっていきたいと思ひますので、よろしくお願ひします。

(杉本) 最後に、私は企画課の職員でございますが、協働推進委員として参加させていただいています。本日は職員としてではなく、委員として司会をさせていただいております。また、違った立場で協働に関わっていきたくと思っていますのでよろしくお願いします。

(司会・杉本) この後もホール後方にブースを用意してございます。各委員がお待ちしておりますので、ぜひお立ち寄りください。本日の講演の内容や協働事例についての質問など、お気軽にお問合せください。それでは以上をもちまして、瑞穂町協働フォーラム2017を終了させていただきます。本日はありがとうございました。

## アンケート集計結果

### 1. どのように今回のフォーラムをお知りになりましたか

・フォーラムちらし	10
・広報みずほ	5
・瑞穂町ホームページ	4
・友人・知人からの紹介	24
・町内会回覧・掲示板	0
・その他	0

### 2. ご参加いただいた理由をお教えてください

・基調講演や協働事例発表のテーマに興味があった	23
・協働について知りたかった	20
・友人・知人からの紹介	9
・講師・事例発表者に興味があった	14
・参加費が無料	3
・その他	0

### 3. 良かったと感じられた内容をお教えてください

・基調講演の内容	29
・協働事例紹介の内容	33
・協働ブース	20
・参加費が無料	2
・その他	0

4. このフォーラムで「協働」に対して、どのような印象を受けましたか

- ・興味を持てた、協働してみたい（行政や地域団体と何かやってみたい） 3 4
- ・協働は重要だと思うが、自ら進んで取り組むことは難しい 4
- ・協働の仕組みを初めて知った 7
- ・協働について、必要性・メリットを感じない 0
- ・その他 0

5. 様々な団体や個人と一緒に活動していくためには、どのようなことが必要だと思いますか

- ・相談できる窓口があること 2 5
- ・地域で活動している団体の情報が得られること 3 3
- ・団体同士の交流の機会があること 2 1
- ・会議等を行える場所があること 1 0
- ・その他 0

6. 自由回答欄：何か町とやってみたい事、瑞穂町をこういう町にしてみたい等

- ・健康で生きがいがいづくりに繋がるような町づくりをしたい
- ・予算がない→ないなりに何とかする→プロジェクトチーム→立案→ネットワークで人材募集→民間の出資→完成。住民に恩恵、出資者の信用アップ。そして次の企画へ
- ・役場も地域の方も協力的で良い町と感じています。他の地域から来た人でも参加させていただけて嬉しいです。横のつながりが増えて、色々な方と話をする機会が増えるといいと思いました。
- ・多くの協働の活動が活発に行えるよう、応援していきたいと思います。
- ・世代間交流、地域交流、未来につながる街づくり  
小さい子どもと一緒に活動できる機会と内容を継続的に行っていきたい。
- ・全体のフォーラムも大切と思いますが、ワークショップ的な個別の活動でつながっていくことが次のステップとして重要と思います。
- ・住民の発信するものに、どう行政が関われるのか、関わるのか。行政の役割分担が見える様で見えない（事例ではよくわかりましたが）これからの方にとってという意味です
- ・リーダーの育成、住民の組織化（協働のための）

- ・今日はありがとうございました。協働についての話を伺うことができ、さらにいろいろな事に興味がわいてきました。
- ・西多摩マウンテンバイク友の会から平地林での活動に参加させていただいています。町外の者ですが、こういった活動を楽しみにしています。
- ・基調講演、事例発表が昨年と同じ。取組みの発展成熟に期待するとともに、私も協働に何かの形で参加できたらと思います。
- ・今後も平地林活動に参加させていただきたいです。
- ・瑞穂町の行っている協働がモデルとなり、まわりの自治体、行政に飛び火していくと、地域の在り方がまた違ったことになっていくのではないかと思います。
- ・来年度の活動計画の紹介があれば、手伝えるのではないかと思います。
- ・平地林でキャンプがしたい！と思いました。
- ・歴史から概念、そして事例紹介と非常にコンパクトだけど、中身が充実した内容に満足できました。自分の将来にも生きがいの感じられる協働への取組みができたら幸いです。
- ・瑞穂住民ではないのですが、近隣として関わっていきたいと思いました。